

開学10周年にあたって



奈良先端科学技術大学院大学元学長・名誉教授
櫻井 洸

早や創立10周年を迎え、おめでとうございます。

本学は大阪・京都とともに文化トライアングルを形成する奈良の地で、地域に密着し、地域に開かれ連携し、国際社会に貢献するための先端研究教育を推進する大学院大学の斬新な構想が提案されたのが平成元年でありました。21世紀を先導する研究者と技術者を先端研究を通じて産み出す学研都市にふさわしい機関として目覚ましい業績をあげつつあります。

特に本学は、企業において第一線で活躍する人材が教官に加わり、あるいは企業に在籍したまま学生として入学する等、さまざまな形の産学共同を機軸としています。しかも国立でありながら、主に学生・若手研究者を支援助成するため、関西経済界により30億円規模の財団が設置されました。

本学は情報科学研究科・バイオサイエンス研究科がまず設立され、さらにそれら分野の発展に不可欠となるであろう新しい機能物質を創り出す、物質創成科学研究科などが順当に創設され、発展、充実が図られています。

わたくしが大学創設にあたって考えたのは、優れた人材が個々の能力を結集できる調和した組織作りが重要であるということでありました。世話大学である大阪大学は言うまでもなく、京都大学の支援なくしては成功しないと考え、当時の西嶋総長を度々訪問し真の協力をお願いしました。その結果、両大学の絶大な支援を得てすばらしい人材が集まることとなり、最新の設備機器を駆使して常に時代を先取りした研究教育が実践されています。

本学は情報科学研究科・バイオサイエンス研究科および物質創成科学研究科の三つからなっています。しかし本学のコンセプトは各科間の融合により独創性の高いものを産む事にあります。研究科内の視野に閉塞せず、社会の要請の変化に応じて個々の研究者が日進月歩の変革を追い求めることが本学に求められる姿でありましょう。

また、設立当初から支援財団との共催によるセミナー等を開き、常に地域の産業界との情報交換や交流を進めてきました。今後は、さらに世界各国の大学・研究機関とともに国際シンポジウムの開催や、共同研究の推進を積極的に図り、人材の一層のグローバル化に努めてもらいたいと思います。

私は平成元年5月大阪大学先端科学技術大学院（奈良）創設準備室長に任命された頃を忘れることはありません。茫漠としたブッシュの山が広がる大学の予定地を見学した時、ここにわが国の先端科学の殿堂が出来るのだと手に汗を握り締める思いでした。情報科学の最高の人材を求めて江坂での人事選考会議。真剣な討議の末、時には阪大熊谷総長に直接、人材移転を要請したこともありました。さらには奈良猿沢の池横のホテルでのバイオサイエンスの会議。

「他の大学に無い研究組織の構築を」という共通の認識によって、世界の第一線で活躍する人材が集まりました。これらのステップの一つひとつが私の脳裏に深く残る思い出であります。

ここに創設準備にあたられた諸先生方に厚く御礼申し上げ、本学の益々の発展を念じます。